

大也の千羽鶴

今日あした

「カーン」凍てつくような空気を引き裂いて銃声が響いた。

大也は、その音を目で追うように、湿原の上に広がる真つ青な空を見上げた。ここは鳥獣保護区なのに……何が起きたのだろう。地上に目を向けると、銃口を下におろした男が、やはり弾の行方を追うように首を少し前に出しながら目を細めて遠くを見ている。

大也は、保護区の人が必要があつて銃を放つたのだろうと思つて、そちらの方に向かつて走りながら、大声で「何かあつたのですか」と叫んだ。

男はこちらを向いて一瞬驚いたような顔を見せると、すぐに踵を返して走り去った。

密猟だろうか。だったら、被害に遭つたものがあるかも知れない。再び目を転じて歩き出した。冬枯れの湿原は、何日か前に降つた雪が解けずに、所々に白い塊を作っている。と、一瞬赤いものが目に入った。丹頂鶴の頭頂だ。大也が近づくと、鶴は羽を力なく動かそうとしている。

「逃げなくても大丈夫だよ」鶴の目を見ながらそつと近づいて、震えている羽をやさしくなでた。鶴はじつとしていいる。大也はそつと体を撫でながらどこを痛めているのか仔細に見ていった。足の付け根の所に少し血が滲んでいる。弾は足をかすめたのだろう。上の方に抉れたような跡えぐがありそこから血が出ている。これでは歩けない。大也はポケットからハンカチを出してそこをきつく縛つた。そして周りを見回して乾いた枯れ草を集め、その上に自分の巻いているマフラーを外して敷くと「ここでしばらく休むといいよ。持ち上げるからね、じつとしていいるのだよ」そう言つて持ち上げた。丹頂は思ったよりずつと軽く、抵抗もなく、マフラーの上にそつと移すことが出来た。

大也はN大学芸術学部の四年生。写真を専攻している。この最後の冬休みには自然をテーマにした卒業制作をしたいと思つて釧路にやつて来た。

ホテルでシェアした小型車が駐車場に停めてあるので、そこまで戻つて丹頂鶴自然公園に行き、事務所の人に、密猟者がいることを言った。

「そうですかー。丹頂鶴は天然記念物に指定されているので滅多にそんなことはないのですがね。しばらく見回りを強化することにしませう」

着いた時には、もう閉館の準備が始まっていたので仕方ないかも知れないが、

こんなに大変な事が起こったのに「見にも行かぬーのか」と腹が立った。

大也はホテルに行く前に、湿原に寄って様子を見ることにした。

冬の日とはとつぷりと暮れているが、車を降りてしばらく湿原の方を見ていたら目が慣れたのか、星明りで広い大地を見渡すことが出来た。と、その時、さっきの鶴が飛び立った。大丈夫だろうか、大也は思わずその方に走った。すると鶴はまるで大也が見ているのが分かっていて招いているかのように、ゆっくりと下に降りて行った。

近くまで行くと、雪の白い土手の先に川が流れていて、何羽もの丹頂鶴が暗い川の中に片足で立っている。

大也は、胸からぶら下げた赤外線カメラを手に取って望遠にすると、夢中でその光景を連写した。

本で見た事がある。丹頂鶴は、湧水の側で片足で立って眠るのだ。湧水の近くは水温が高く、外気よりも水の中の方が暖かくて凍らないことをタンチョウは知っている。それに水の中には外敵が入りにくいので安全な場所なのだ。

一本足で立ち、もう一本の足は、腹の部分にたたみ込み、背中の羽毛の中に頭をうずめて寝ている。

ここに来る前に読んだ『丹頂鶴』の本には、秋から冬にかけて群れをつくるタンチョウたちにとって、一番怖いのが水かさが増して羽が濡れることだと書いてあった。羽毛に着いた水はすぐに凍ってしまい、体の動きを鈍らせるので、こんな方法で眠るのだと。書かれていたそのままの恰好が、目の前に広がっている。

大也はホテルに向かう車を運転しながらも、ずっと興奮していた。あんなスポットが見つかるとは思ってもよらなかった。あの静かな木立ちの中から見た真っ暗な川。ひっそりと片足で立ちながら眠っている何羽もの鶴たち。息をひそめながら望遠で連写をした時の武者震い。

街中に入ると、大きな通りから外れた小路に、「鶴」と白地に黒く浮き上がるように描かれた看板が見えた。おーっ、夕飯はあそこにしよう。

ホテルの駐車場で、乗っていたシェアカーを指定の場所に停めると、まるでさっきの「鶴」が俺を呼んでいるような気になって、ホテルに入って鍵を受け取るのもどかしく、昨日チェックインした四階の部屋にカメラや三脚の入った荷物を置き、外に飛び出した。そしてさっきの店を目指した。

「鶴」の扉を開けると、カウンターといくつかテーブル席がある店内を見渡し

「そう、大層、豪勢なお名前ね。で……、ダイヤさんは只今、何カラット？」
からかうように目が笑っている。

「？ ああ、まだ原石で、唯の石ころっス」

「フッフ、まだ原石なのね」

女将は、その答えが気に入ったようで、嬉しそうに笑った。

「それなら、これから磨いて光らせなくてはね」

大也は、女将は楚々としていて大人しい人だろうと思ったけど、結構面白い事を言うんだ、と思つて適当に相槌を打った。そして、取りあえず、まだ腹も空いているし、目の前のおでんと飯を平らげて、やっと人心地がついたので、ダウンジャケットを脱いで壁の所にあるフックに掛けた。

「何か造りましょうか」

「あー、おでんをもう一杯、それから熱燗もお願いします」

「嫌いなものはあるの」

無い。と言うと、女将はおでんの大きな鍋の蓋を取って、玉子や大根、ちくわの他にも、蛸を串刺しにしたものや、皮が付いたままのジャガイモなどを、又、山盛りにして出してくれた。大鍋の熱気と、皿から立ちのぼる湯気で、店の中が一気に暖かくなった。女将は、縦も横もがっしりとした大男の大也を見て、腹にたまるものを選んでくれたのだろう。

腹いっぱいになってホテルに帰ろうとしたら、女将が

「ダイヤさん、丹頂鶴の写真を撮るのだったら、明日の朝、此処にいらっしやい。私が案内してあげるわ」

「えーっ、うっれしいなあ。あのお、女将さんは、なんっーか、名前は？」

「鶴です。丹頂鶴の鶴」

えっ……もしかして、鶴の恩返し？ 怖えー！ 大也は、立ちかけた椅子に再び尻を戻して、気を静めた。そして、

「ビールもお願いします」と言ってから、壁にかけたダウンジャケットのポケットから折り紙を取り出し、白の紙を選んで丁寧に鶴を折り始めた。折り上がると、背中の部分を膨らませて羽を広げ、カウンターの上に置いた。

「あら、折り鶴」

大也は、またポケットをぐそぐそしてマジックを取り出すと、天辺に赤い色を付けた。

「まあ、きれい。丹頂鶴ね」

「上手いっしょう！ 俺、母子家庭で育ったんす。俺が一才になる前におやじ

が死んじまつて……。おやじは大手の建築会社に勤めていたけど、視察に行った現場で事故に巻き込まれて……。お袋は補償金で食堂を始めたんです。俺が小さかったから、いつも一緒にいられる環境で育てたかったんだって言ってました。店が忙しい時はばあちゃんが来てくれて……。ああ、おふくろの母親。俺は物心つく頃には、大抵の折り紙は出来るようになっていたっス」

「お母様は、いまでも食堂を？」

「はい。ちようどここと同じくらいの広さで、昼は定食、夜は酒も出して……。働きもんっス、おふくろは」

「私を見ていたら、お母様を思い出した？」

「ぜーんぜん違いますよ。おふくろは俺に似て、じゃなくて、俺はおふくろに似ているから、縦も横も大きい大女です、女将さんとは全然違いますよ」

「私の連れも、銃で撃たれて亡くなったのよ」

「銃で撃たれて？……って、女将さん、じゃなくて鶴さんはすっごく若いし、連れって旦那さん……ですよね、戦争に行くような年では無いでしょう」

「いいええ、もう四年前になりますけど、この釧路湿原で密猟者の放った流れ弾があたつてね、命を落としたの」

「過失致死って感じ？ あ、いや、密猟者はもともと犯罪者だから、だからって人間は狙わないから……。鶴を狙ったんだ」

「そうだと思うけど、運が悪かったんだわ」

店を出てホテルに帰ってからも、大也は、気味悪く引っかかっていた。あの鶴さんって、何者だろうか。いい女だったけど、飲み屋の女将って感じじゃなかった。と考えているうちに、ぐっすり寝てしまった。

翌朝、早々とホテルを出て、前日に飯を食った食堂に行った。鶴さんは約束通り〈鶴〉という看板のかかった店で、握り飯と味噌汁を用意して待っていてくれた。

色白で背のスラッと高い鶴さんは、昨日と同じように髪の毛を頭のとっぺんで鬘のように纏めていて、真っ赤な紐が飾りのように付いているのが見えた。だが、真っ白のとっくりのセーターと紺のGパン姿は、昨日の女将の和服姿とは別人のようだった。

「そろそろ、出かけましょうか」、大也が飯を食い終わるのを待って、鶴さんは先に立って店を出て、駐車場に停めてあるジープに乗り込んだ。大也も急いで助手席に乗り込むと、ジープは勢いよく走り出した。

前の日に行った釧路湿原の近くまで来ると、空気がぴーンと張り詰めたよう

な寒さで、一面霜の降りた大地が広がっていた。運転をしている鶴さんは、色々な事を話してくれる。

「わたくしの連れが、銃で撃たれて亡くなった話はもうしましたわね」

「わたくし？」そんな言葉を使う奴なんか、俺のまわりにはいないよなー、そんなことを考えていたら

「聞いていらっしやる？」静かな声で促された。

「聞いているっす。…流れ弾が中つたんですよね」

「正確に申しますと、密猟者が丹頂鶴に銃口を向けているのを見て、反射的に鶴をかばって、前に出たのです。密猟者もまさか人間がいるとは思っていません。たとは思いますが、人間が倒れたので慌てて逃げてしまったのです。」

連れは、土地の資産家で、丹頂鶴の保護活動を精力的にしております。連れがまだ少年の頃、丹頂鶴は絶滅の危機にあったのです。彼の親たちが保護の手を差し伸べたのですが、鶴はなかなか近づいてこなかったそうです。それから三十年位経った大雪の年に、タンチョウの餌場がすべて雪に埋め尽くされ、已む無く人間に餌を求めるようになったそうです。今では彼を中心にした給餌は、毎年十一月から翌年の四月末まで行われるのですが、餌やりから資金の調達まで、本当に頭が下がりました」

頭が下がりましたって、鶴さんは、本物の鶴みたいじゃん、と思ったら、それを見透かしたように

「だって、羽を水平に広げてゆっくり羽ばたきながら飛んで来る丹頂鶴の姿は、うっとりする程優雅ですよ。ですから、写真家を目指していらっしやる大也さんには、是非良い写真を撮って頂いて、有名になってこの阿寒町の取り組みを宣伝して頂きたいの」

静かな話し方の内に力がこもっていて、大也は柄にもなく胸が熱くなった。

「この先にありますトンネルを通りますと、時空を越えられますよ」

「あんまり静かな話し方だから、聞き逃してしまう所だったが、
「それって、バックトゥザフューチャーの世界じゃん！」

トンネルを過ぎると、真っ青な空を舞っていたタンチョウがゆっくり雪原に降り立つのが見えた。それから長い首を伸ばし、嘴を上に向け、クオー、クオーと甲高い声を張り上げた。

「すげー！」大也の声を聞くと、鶴さんは車を停めて

「素晴らしいでしょう。寒い冬の間、丹頂鶴は釧路市のこの阿寒町一帯に移り住んで冬を過ごしますのよ。ほら、次々にやって来ますでしょう、この近くに

給餌場がありますのよ、見ていてごらんなさい」そう言って車を降りた。

鶴さんは幾つ位なんだろう。大也も車の外に出ると景色とは全く別の事を考えていた。連れがいたんだから三十くらいかなー。

「ほら、騒がしくなったでしょう。ここはタンチョウの社交場でもあるんですよ」

数羽のタンチョウが、足で雪をけり、舞い上がり、舞い降り、クオークオークと鳴き、向かい合って翼を広げ、体を左右に振りながら鳴き合っている。つい見入っていると、次には、首を大きく下にゆっくり折り曲げ、しなやかなポーズをつくる。『色っぽいな』

「気を引いているんじゃないかー」思わず大也は声に出して言ってしまってから、鶴さんを盗み見た。鶴さんも腕を組んでうっとりとした顔をしながら、小さく顎を上げたり下げたりしている。

そして、見ているうちに一羽がもう一羽の背に飛び上がった。

「おう、交尾している」大也が言うと、鶴さんはニコツと笑った。

俺たちは、一気に親しくなって、車に乗ってから抱きあった。それから、鶴さんの連れが所有していた山の家に泊まって、又抱き合った。

俺はその度に鶴を折った。折り目をシャープに整えて念入りに折った。鶴さんに何かをして上げなくては納まらない程、鶴さんに夢中になった。

山の家に寝泊まりしながらも、鶴さんは精力的に色々な場所に、俺を連れて行った。

幾つかのトンネルをくぐりながら、春や、夏、秋の景色を撮った。

「ここは根釧原野。ほら、あの雄と雌は、つがいになって、繁殖地にやって来ましたでしょう、蘆で作った巣の中で卵を産みますのよ。卵は一カ月くらいで孵化して幼鳥になります。そうしたら巣から離れて、広い縄張りを作ってそこを転々と移動しながら雛を育てますの。ほら、見ていてごらんなさい、他のタンチョウが来ても追い払ってしまいますでしょう。」

タンチョウは、一度結婚したら終生、その方と添い遂げますのよ。そして産卵は二個。人間と同じように大切に育てますの。孵化したばかりの時は夜になると親鳥の翼に抱かれて眠ります。その後も、雌雄どちらかが必ず傍に付いているんです。孵化して百日ぐらいで、親鳥と同じくらいに成長して、やっと空を飛べるようになりますのよ」

鶴さんは、愛おしそうに鶴の話をし、まるでフィルムの早回しのように、大也をあらこちらに連れて行った。俺は何時間もそこで、あるきまわりながら、

又、じつと留まって納得がいくまで取り続けた。

子育て中の警戒心いっぱい親鳥。

足と嘴を水につけて餌をさがしているタンチョウ。

親鳥と一緒に空を飛ぶ練習をしているタンチョウ。

大也は数え切れないほど撮った。

鶴さんは、ずーっと傍にいてくれた。

× × ×

山口銀の許に、大也宛の封書が届いたのは、大也が行方不明になってから三年が過ぎてからだだった。それは『志門拳フォトコンテスト・最優秀賞受賞』の便りだった。

大也は生きていた。

銀は、その大判の封書を仏壇の前に置いて、長い間手を合わせていた。夫の康雄が死んでから、喜びも悲しみもみんな、こんな風に仏壇に手を合わせ乍ら報告をして来た。

〈康雄さん、大也の顔はまだ見ていないけど、生きていたのよね、そうよね〉
銀が、ここ神楽坂に「キッチン・シルバー」という小さな食堂を始めたのは、大也がまだ一才になったばかりの時だった。夫が亡くなって途方に暮れていた時、居抜きで店を譲ってくれるという話が舞い込んだ。

銀は、幼い子供を抱えて、藁にもすがる思いでその店を買うことにした。実家が千葉で、食堂をやっているとはいえ、子育てをしながら、調理の免状を取り、店を切り盛りするのは並大抵のことではなかった。

大也が大学四年になった冬休み「卒業制作をするから」と言って、カメラを幾つも持って北海道に出かけた時には、

〈康雄さん、大也はもうすぐに卒業して一人前になるのですよ。思う存分、良い写真が撮れるように、見守ってやってください〉と、長々と手を合わせたものだった。ところがお正月になっても帰って来ない。携帯もつながらない。近所の幼馴染に聞いても知らないという。

銀は、松の内が過ぎると「一週間休みます」の張り紙をして、北海道に行つて見た。

行方不明になった当初、釧路のホテルから連絡があり、三日間の予定で部屋

を予約していたようだ。

「一日目はお泊りになったのですが、二日目の早朝出られて、お部屋の鍵は預かって居りますが、それ以後、帰られた様子はございません。お荷物もそのままになっております」

その時は、チェックアウトの手続きだけ電話で済ませ、その内に戻るだろうからと、荷物は預かって貰っていた。大学生になってからはこれまでも、撮影に行くと言って何日も帰らないことがあった。あの子は何かに夢中になると周りが見えないのだ。お金が無くなれば帰ってくるだろうと思っていたらもう一か月近くなる。

ホテルに着くと、支配人が、大也がチェックインした十二月二十一日、午後八時に印字した用紙を持って来て、その時の様子を説明してくれた。

「お部屋の鍵をお渡ししましたら、一度、四階のお部屋まで行かれて、すぐはこちらに戻っておいでになりました。頼まれて、市内の地図をお渡ししましたら、レンタカーを借りたいと言われましたので、市内でしたら、カーシェアリングが出来ますのでその方がお得ですよ、とお薦め致しました。車を駐車場にお返しになったのが、二十時十三分となって居ります。その後、フロントで鍵を受け取って、お荷物を置きに行かれ、またすぐにお出かけになりました。戻られたのが……えーと、二十二時十分ですね。翌朝、十二月二十二日の……、午前六時にフロントで鍵をお預かりしています」

銀は、親切なホテルの支配人にお礼を言い、自分もチェックインを済ませた。支配人が気を利かせて、大也が泊まった四階の部屋に案内してくれたのでぼんやりと外を眺めた。そこから、暗い寒そうな冬の海が見えた。黄昏時のせいか、黒ずんだ雪の山が所々に築かれている。街中に車の往来はほとんど無く、重く沈んで見える。

康雄さんは、行ってきます、と家を出てそのまま帰らぬ人になったのだった。大也がそんな風に、康雄さんと同じになる筈が無い。あの子は何かに熱中しているだけなんだ、何かあってたまるものか。銀は、目に見えないものに挑戦するような気持ちで、そう思った。

次の日からは、ハイヤーをチャーターして、精力的に警察に行ったり、雪景色の撮影スポットを回ってもらって、人がいるようなところでは、大也の写真を見せながら聞いてみたりしたが、結局、何の成果もなかった。

そして、今回の「志門拳フォトコンテスト最優秀賞」の便りだ。すぐに、そのコンテストを主催している毎朝新聞社に問い合わせしてみた。

「山口大也さんの返信用の封筒は、神楽坂のご住所と、連絡先の、釧路市の郵便局気付の二通ありましたので、二か所に受賞の通知をさせて頂きました」という事だった。

銀は、三年前に大也が行方不明になった事情を説明して、

「授賞式には、母親の私も出席させて頂きたい」と申し入れた。

「わかりました。お母様にも招待状をお送りさせて頂きます」との返事だった。

招待状が届いた。場所は、神楽坂の近くの大学で、十二月十日午後一時よりと書いてある。二週間先の日曜日だ。その日は臨時休業として、早々と店の目立つところに貼りだして置いた。後は、大也が帰って来るのを待つばかり。何だか宙を浮いている気分で、落ち着かない。仏壇に向かって、

「大也は、まだ帰って来ない」

「大也は、何をやっているのだろう」と、何度「チーン」と、かねを鳴らしたことだろう。とうとう十二月十日になり、その日の昼になった。

銀は、一張羅のスーツを着こんで、歩いて十分もあれば行かれるその大学に出かけて行った。会場に着くと、入り口で〈山口銀〉の名前が書かれたリボンを渡され、待合室に案内された。

「よっ、かあさん」

大也は先に着いて、係りの人に銀も出席することを聞いたようだ。

「だいやあー」名前を呼んでしまったら、大女の銀は仁王立ちになった儘、何を喋っているのか言葉も出ない。その後、怒涛の如く怒りが湧いて来た。

「何が『よっ』だよ。今まで何処で何をしていたんだい。父さんだって、あんなことになったんだ。母さんはどんなに心配したか知れやしない」

「だって……、旅行に行くって言ったじゃないか。かあさんだっていつも、お前は鉄砲玉だって言っているから……心配なんかするなって」

「物には限度つてもものがあるだろう。三年間も、だれが旅行をするんだい」

「ええ、三年って、何を言っているんだよ。バツカじゃねえの！」

「誰がバカなんだい、今日が何年何月なのかわかっていないのかい。お前は狐にでも化かされているんじゃないのかい」

睨みあっている二人の耳に、

「志門拳フォトコンテスト」の授賞式が始まりますので、皆さま、御着席をお願いします」と、アナウンスが聞こえた。二人は睨みあったまま、別々の指定

席に向かった。

× × ×

大也は、指定された二列目の中央付近の席に座った。

今朝は、鶴さんが釧路の空港まで送ってくれた。空港まで行く途中の車の中で、大也が撮った写真が、志門拳フォトコンテストで最優秀賞を受賞したことを聞き、授賞式の招待状と、羽田までの航空券を渡された。その時も、何も不思議だとは思わなかった。

母さんに言われるまでは……。

式が始まり、主催者や、関係者の長い挨拶が、大也の頭の上を流れていく。日付を見ると、大学四年の冬休み、釧路に行ってから三年近く経っている。そんな筈はない。鶴さんに誘導されながら写真を撮りまくっていた日々は夢中で、昼も夜もなく今日が何日かなんて考えた事も無かった。

一か月でも一年でも、そう言われたらそうかもしれない。

三年も？……。経ってしまったんだ。

大也は数え切れないほど撮った。

その中の一枚を選んだのも「志門拳フォトコンテスト」に応募したのも、全部、鶴さんの独断だったのだ。鶴さんと一緒にいる間中、俺には思考力つうものが皆無だった。つうか、鶴さんの事ばかりか思考してた。

表彰式の舞台では、いよいよ、最優秀賞受賞者・山口大也の名が呼ばれ、壇上上がった。

受賞作品「しなやかなポーズの丹頂鶴」が、大型パネルに写し出された。雪の大地を背景に、どこまでも美しく上品な丹頂鶴が羽を広げ、長い首の上の頭を伏せるようにして下を見ているポーズの写真。

見る者に、やるせない求愛の気持ち伝わって来るような余韻があった。

「ふうー」という音にならないざわめきが会場を満たした。

「審査員の全員一致で、この作品が選ばれました」。

審査委員長の祝辞の冒頭で、この言葉が言われた。

× × ×

授賞式が終わったら、すぐに釧路に行く。という大也に、銀は、

「待ちなさい、家に寄って仏壇の前でお父さんに報告をしなさい。それから私も行くから！ 又、狐にでも化かされたら、たまったもんじゃない！」

そう言うと、

「うん、いいよ。向こうには鶴さんっていう女の人っていて、その人があの写真を撮らせてくれたようなものなんだ。母さんも、会ってよ」

大也は、訳が分からなかったとは言え、三年間も音信不通でいたのは悪かったと思っっているのだろう。銀は、鶴さんって狐じゃないのかい？ という言葉を辛うじて腹に抑え込んだ。

翌日、朝一番の飛行機で釧路に着くと、タクシーで街の路地裏にある〈鶴〉

の看板のあるお店に直行した。そして大也は裏口から中を覗き込んで、大声で

「こんにちは、大也っス」と叫んだ。

階段を下りる音がして、女の人が顔を出した。

「ああら、大也君、おめでどう。授賞式は済んだの」と、驚いた顔をしている。

「はい。えーと、これ、おふくろっス。山の家におふくろを連れて行きたいけど、女将さん、いいかなあ」

「かまわないわよ。忘年会シーズンだから、夕方までには帰らなくてはいけないけど。大也君のお母様、この度はおめでどうございます」

「大也の母の銀と申します。長い間、大也が大変お世話になりましたようで……。ありがとうございます」

「話は、車に乗ってからにして、私、支度してきますから、表にまわってお店の方で少し待っていて下さい」

女将さんは、お店のドアを開けて二人を中に招じ入れお茶を出すと、慌しく二階に上がって行った。そしてまた慌しく降りて来た時には、Gパンと、白いつつくりのセーター姿になってカウンターのの中に入って、「こうやって、一週間に一度は山の家に食料を届けていたのですよ」といいながら、洗濯籠のような大きな入れ物に、何やら沢山詰め込んだ。

「さあ、行きましょう」

こうして三人は車に乗り込んだ。街中を少し走ると海が見えた。

「海が見えるんですね」

銀は、三年前、ホテルの窓から見た暗い海を思い出した。

「釧路は少し高い所に行くのと、どこからでも海が見えるのですよ」
女将はそんな話をしながら、雪景色の湿原に向かった。

「三年間も、大也はどんな風に暮らしていたんでしょうか」

銀は一番気になる事を聞いてみた。何といっても学生の分際で、いくらアルバイトでお金を貯めたからって、せいぜい一週間くらいしか持つわけがない。

「ああ、大也君からは、何も聞いてないんですね。」

実は私の連れ合いが四年前、事故で亡くなりました、かなりの財産を残してくれました。彼とは三十以上、年の差がありまして、まだ結婚したばかりでした。

給餌場で知り合ったのですよ。店をやっていたので籍を入れるつもりは全くなかったのですが、彼は、早くに奥さまを亡くされ、子供もいないのでって、籍に入れてくれたのです。虫の知らせ……でしょうね。だから私は彼の遺志を継いで、遺してくれた財産はタンチョウの為に使おうと思っっているのですよ。大也君にも話したんですが、まず彼に投資して、良い写真を撮ってもらって、多くの人にタンチョウに興味を持って貰おうと思っただけですね、途中からは彼の才能に魅せられて、もう夢中になって……」

最後は、冗談半分に笑いながら喋っていた。

山の家までは、二時間もかからなかった。

亡くなった旦那さんの持ち物だったという山の家は、雪の中の轍のない所を走った先の国立公園の中にあつた

大也は、車が停まると同時に助手席のドアを勢いよく開け、大きな体をゆすりながら家に向かって走り出した。

呆気に取られながら車を降りた銀は、傍に来た女将に、

「誰かいるのですか」と訊いた。

「鶴さんがね……」

女将は、困ったような顔をして笑った。

そして、銀を車の中に誘って想像もつかないような話を始めた。

女将の話し

私はもともと鶴っていう名前なんです。店の看板にもあつたでしょう。たまたま店に来た大也君に、傷ついた丹頂鶴を助けた話と、写真を撮るために来たことを聞いて、存分にタンチョウを撮って貰おうと思って山の家に来てきたんですよ。

最初の一週間は店を閉めて、私が案内して、降雪で真っ白になった湿地帯で、タンチョウが求愛のダンスをするのを見たりして、私たちは恋人同士のように一週間を過ごしたんです。私は三十路を過ぎてはいるんですけどね。店の事もあって一旦街に帰りました。そして、日曜日になり、食料を買い込んで山の家に行ったら、大也君はすっかり変わっていました。

鶴さんっていう恋人ができたんです。私には全く見えないのだけど、なんか憑りつかれたみたいで……大也君は私には見えない何かに向かって話しているのですよ。

部屋には一週間の間に撮った写真が散乱していました。どれも私が見た事のないようなアングルから撮っていて……みんないいんですよ。

大也君は、鶴さんを鶴の化身だと思ったみたいです。ほら、鶴の恩返しって、あるでしょう。

始めのうちは、私と、架空の鶴さんを混同しているみたいでしたが、わずかの間に、私の事は、女将さんと呼ぶようになって……。それでも、コンテストに出した作品は私が選んだんですよ。

それが、大也君は上手い具合に混同してくれますのよ。

ヒーターを効かせた車の中で銀は、奇しくも狐に化かされたのだと思っただけ、本当にそんなことがあるのだと、信じられない思いだった。だが、三年の時は経ったのだ。ハッと女将を見て

「よく、三年間も……、ありがとうございました」と口をついて出た。

「……、楽しかったですよ。磨き甲斐がありました。何といってもお名前がダイヤですものね。でも、お母様にはご心配をおかけして申し訳ありませんでした。大也君の集中を途切らせたくなかったのです」

車を降りてから二人は揃って山の家に向かった。

中に入ると、暖房も入れてない居間で、大也がソファにもたれ掛かって魂が抜けたように大の字に座っている。

テーブルの上には、折り鶴が山のようにあった。

「千羽あります。大也君を空港に送ってからここにきて糸で繫いだんですよ。丁度千羽。」

鶴の化身は本当にいたのでしょうね。望みが叶ったんだもの」

鶴さんは恍惚の表情になって、こう言った。

完